

黄埔軍官学校と朝鮮人 (『むくげ通信』272号、2015.9.21より)

一神戸・南京をむすぶ会第19次訪中レポート

飛田雄一

神戸・南京をむすぶ会はほぼ毎年、中国を訪問している。むすぶ会は、1996年に神戸市王子ギャラリーで開かれた「丸木位里・俊とニューヨークの画家たちが描いた南京1937絵画展」の実行委員会が中心となって、97年2月27日に結成された会だ。もともと実行委員会メンバーが一度は南京現地を訪問したいということできた会で、まさか今日まで継続するとは予想していなかった。



(2015.8.14 虐殺現場のひとつ燕子磯の記念碑前で。今年は解放70年で記念碑の化粧直しがおこなわれている。屋根の職人さんといっしょに記念写真)

毎年、南京以外にもう一ヵ所、日本軍が侵攻した場所を訪ねることにしている。訪問先は、97年、南京・淮南、98年、南京・撫順、99年、南京・太原・大同・北京、00年、南京・ハルビン、01年、南京・蘇州・杭州、02年、南京・重慶、03年はSARSの関係で訪中できなかつたが、04年、南京・大連・旅順、05年、南京・濟南・青島、06年、南京・無錫・石家庄・天津、07年には8月に南京・武漢、12月にも記念館リニューアルオープンの南京、08年は、南京・瀋陽・長春、09年は南京・牡丹江、虎頭、虎林、10年は南京・延辺朝鮮族自治州、11年は、南京・海南島、12年は南京・香港、13年は、南京・台湾、14年は南京・上海、そして今年は南京・広州を訪問した。05年以降は、神戸・南京をむすぶ会と兵庫在日外国人教育研究協議会の共催プログラムとして実施している。南京では、南京大虐殺の跡地をフィールドワークし、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館での恒例の8・15集会に参加し、幸存者の証言を聞く。その他の訪問地でも、出来る限り事前に調査をして十分なフィールドワークができるように心がけている。

これまでむくげ通信に、朝鮮関連のところを訪問したときには、書かせていただいている。

- 1) 南京大虐殺の現場を訪ねる旅 164号(1997年9月28日)
- 2) 南京再訪、そして731&安重根のハルビンへ 182号(2000年9月24日)
- 3) 「南京大虐殺への道」を訪ねて 188号(2001年9月)
- 4) 上海・南京・大連・旅順フィールドワークに参加して 206号(2004年9月26日)
- 5) 延吉に尹東柱の生家などなどを訪ねて 242号(2010年9月26日)
- 6) 南京・海南島・上海への旅一神戸・南京をむすぶ会フィールドワーク2011夏一 248号(2011年10月2日)

2000年の「南京再訪」では、安重根の像が戦後取り壊されたと聞いて、不思議に思いながらハリビン駅のその現場らしきものを発見して喜んだ。が、それは安重根ではなくて伊藤博文の像だったことがわかり、生半可な事前情報に頼ってはいけないことを猛省したことがあった。

大韓帝国の臨時政府跡も上海、重慶と訪ねている。(もう1か所といったがどこか忘れてしまった。)

今夏は、南京4泊、広州3泊というスケジュールだった。南京4泊というのは比較的余裕のあるスケジュールで、これまで南京の時間が足りないという要望に応えたものだ。関空・南京の直行便の数が増えたのでそれが可能になったのである。上海に入国したのち南京に向かうことが多いが、その長所は本多勝一などが書いている南京大虐殺につながる「南京への道」を疑似追体験できるということだ。一方問題は、上海から南京まで時間がかかるということだ。今回は、南京に直行した。

スケジュールは、以下のとおりである。

- 1) 8月12日(水) 16:30 関西空港Gカウンター前集合、MU(中国東方航空) 2860 18:30→南京空港 19:30(現地時間、時差1時間) 南京泊①
- 2) 13日(木) 南京フィールドワーク① 南京泊②
- 3) 14日(金) 南京フィールドワーク② 南京泊③
- 4) 15日(土) 追悼式典 南京大虐殺記念館参観 南京フィールドワーク③、南京泊④
- 5) 16日(日) 南京空港 07:40 → MU2807、広州空港 09:55、広州魯迅故居(工事中で入れず)、石

- 馬桃花公園の「血涙洒黃華碑」(日本軍の空爆で被害)、
黄埔軍官学校跡視察。広州泊①
- 6) 17日(月) 広州郊外石頭村へ移動、「粵港難民之墓記念碑」視察、午後市内に戻り 中山大学医学部旧図書館(華南防疫給水部本部跡) 視察、広州泊②
- 7) 18日(火) 午前中専用車にて中山市へ移動、午前中 中国革命の父「孫文記念館」訪問、午後珠海市三竜村の「旧日本軍軍用基地」視察 広州泊③
- 8) 19日(水) 広州空港 07:30、FM(上海航空)9304便→上海浦東空港 09:50、同空港 12:35、MU747便→関空 15:40

南京は、第1回より現地ガイドをしてくださっている戴國偉さんとの息がぴったりあっている。毎年新しいところを発掘し案内してくださる戴さんの事前調査能力に負うところが多いが、リピーターも初めての参加者も大いに満足している。この旅は毎年15名から25名ぐらいが参加するが、そのうちリピーターが半分ぐらいとなっている。この種の歴史ツアーは(最近はダークツーリズムという言葉もある)最小催行人数に悩まされ主催者は多いが、このツアーに限ってはこのリピーターのおかげで主催者が成立するかとやきもきしたことがない。ちなみに、19回全部参加はツアコンの私だけだが、15回以上参加というメンバーが7、8人いる。訪中後はそのメンバーが中心になって翌年は南京のあとどこへ行こうかと新年会などで相談するのだから、また翌年も行くことになるのである。

旅にトラブルはつきものだが、南京ツアーにもときどきある。今年は、参加者のAさんが、再発行したパスポート番号ではなくて古いパスポート番号で中国国内線飛行機を予約したことから、広州に向かうときに南京空港で大ピンチになった。関空では問題がなかった。が、南京・広州の国内線ではダメだ、乗れないと言われた。パスポートは日本政府が発行するが、旅券事務所が都道府県にあるように都道府県が発行主体となる。したがって本籍を変更したら、パスポートも新しいのをつくるなければならないようだ。Aさんは、それで新しいのを作ったのだ。リピーターのAさんは旅行会社が以前のパスポート(有効期限はまだ残っていた)でチケットをとったのだ。国際線は、パスポート番号は不要だが、中国国内線は必要なのだ。おそらく、中国人は身分証明書の番号が必要だからであろうと思う。

南京空港は込み合っていてカウンター締め切り時間まであと15分というときのトラブルでほんとに困った。広州で待機の神戸華聯旅行社のKさんに電話をする一方、ツアコンの私はAさんの新しいチケット(高い、52000円もする)を買いに走った。そこはけっこう離れていた。走りながらAさんのパスポートがないと買えないと思い至り、またもとの場所に戻った。最近、走るのはつらい。で、戻ると

戴國偉さんのところに神戸華聯旅行社Kさんから電話があった。パスポート番号が訂正され、OKとなつたとのことだ。よかった、うれしい。たまたまKさんがホテルにいた時間帯でインターネットがつながっており、短時間でパスポート番号の変更が可能となつたのである。

ウロウロ走りながら、Aさんのチケットを買っても時間切れになれば、Aさんと戴國偉さん(広州には団員として参加)に、次の飛行機で追いかけてもらおう、そしたらチケット代、なんばかかるのだろうかなどなど、思いめぐらしていた。OKとなって、どつと力が抜けた。(ツアコン的趣味?からトラブルのことを長々と書いてしまった。)

そして全員無事に広州空港に到着した。朝は早くて8時の飛行機に乗ったので10時に着いた。前日まで大雨だったとかで暑い。11時には広州フィールドワークに出発した。30分ほどで石馬桃花公園についた。日本軍が作ったと思われるトーチカ2基を見た。広州ガイドのSさんは、暑い中公園内を走り回ってトーチカを見つけてくれた。次に、「血涙洒黃華碑」を訪ねた。日本軍の空爆で一般市民も大きな被害を受けた所にある。全員で黙祷した。



昼食後、黄埔軍官学校跡地に向かった。広州は、広東料理の広東省にある。「食は広州にあり」の広州だ。広東料理はほんとうにおいしかった。そのためにももう一度広州に行きたいぐらいだ。

広州より南に車で2時間ぐらいのところに黄埔軍官学校跡がある。フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると次のようにある。

黄埔軍官学校は中華民国大統領総統の孫文が1924年に広州に設立した中華民国陸軍の士官養成学校である。黄埔軍官学校の設立は孫文の主要な顧問となっていた、コミニテルンの工作員ミハイル・ボロディンの進言によるものであった。当時は第一次国共合作が行われていたため、中国国民党だけでなく、中国共産党的軍人も入校した。後、台湾の陸軍軍官学校として再建されている。黄埔は北京語ではホアンプー(Huangpu)、広東語でウォーンボウと読み、英語では Whampoa とあてる。

黄埔軍官学校は、最新版の『地球の歩き方』にも紹介されているぐらいメジャー?だ。私はこの学校に朝鮮人が多く入学していることを聞いていたので一度は訪問したいと考えていた。水野直樹さんが、朝鮮民族運動史研究会の研究誌である『朝鮮民族運動史研究』6号、1989年12月に、「黄埔軍官学校と朝鮮人の民族解放運動」という論文を書かれている。この論文は、彼がニム・ウエルズ、キム・サン共著『アリランの唄』(岩波文庫版1987年)補注のために研究したものをベースに執筆されたものとのことだ。以下、特に出典を書かないものは水野論文からの引用である。

黄埔軍官学校に関する飛田の勘違いがあった。告白しておく。それは上海に黄浦があるが、その黄浦沿いに黄埔軍官学校があると思っていたのだ。上海にはむすぶ会で何回も訪問しているので、その上海の学校に一度は行ってみたいと思っていたのである。がそもそも「黄埔」と「黄浦」は漢字が違っている。勝手な思い込みであった。行こうと提案しなくてよかった。

黄埔軍官学校跡はそのまま残され博物館となっている。60歳以上は外国人も無料で、65歳になった私は「免費」で入場させてもらった。



学校の名称であるが、水野論文によると「陸軍軍官学校（のち中央軍事政治学校）は、広州近郊の黄埔に近い長洲島（珠江の中州）に設けられたため、一般には黄埔軍官学校の名前で知られる」とある。

黄埔軍官学校は、1924年6月16日に「開学典礼」が開かれた（同年5月5日にはすでに第1期生が入校している）。翌1925年3月12日には設立者の孫文死去、5月30日には「5・30運動」

（上海でデモに対して租界警察が発砲し、学生・労働者に13人の死者と40人余りの負傷者がいた、ウイキ）が起こるような情勢だったのである。



（学生の宿舎と教官用の食堂）

学校は1926年3月20日の広州で軍艦中山艦の回航をきっかけに、黄埔軍官学校長蒋介石が中国共産党員らの弾圧を開始した中山艦事件を契機に以降蒋介石が実権を掌握することになる。1927年に4月12日に蒋介石が、上海で中国共産党を弾圧する「上海クーデター」を起こし、同月15日には広州でも反共クーデターが起こされる。そして、同年7月13日に共産党員が武漢政府より退去して国共合作が終わるのである。

朝鮮人の黄埔軍官学校入校にはいくつかのルートがあったようで、学校創設以前の時期から、李範奭、申圭植、金九、孫貞道、呂運亨、金元鳳（金若山）などが関係していたようだ。黄埔軍官学校の設立は、朝鮮の独立のためには武装闘争が不可欠であると考えていた独立運動家に大きな希望を与えるものであったのである。

金元鳳は義烈団のリーダーであったが、義烈団員が多く黄埔軍官学校に入校した。義烈団は、1920年代前半、日本要人や朝鮮総督府に対する暗殺・破壊などのテロ活動を行っていたが、1920年代半ばに方針転換を行ない、従来のテロ活動から本格的な軍事教育を受けて「民衆の一大武装闘争」の展開を目指すことになったのである。金元鳳については鹿嶋節子さんがむくげ通信103号（1987年7月）で「金元鳳と金九の合作」を書き、その後、金元鳳らが1938年10月に漢口で作った朝鮮義勇隊の機関誌『朝鮮義勇隊通訊』について、150号（1995年5月）から158号（1996年9月）を書いている。（『朝鮮義勇隊通訊』を読む）

は、むくげの会編著『新コリア百科』（2001年2月）にも収録されている）

義烈団員の入校について日本の官憲資料に次のような記述がある。



（自習室と勉強中の亀）

「義烈団長金元鳳及広東在住不逞鮮人首領孫斗煥ハ広東政府首領蒋介石ニ接近シテ朝鮮革命ニ際シ軍務ニ服セシムル目的ヲ以テ鮮人学生ヲ黄埔軍事政治学校ニ入学セシムヘク諒解ヲ求メ大正十四年夏頃ヨリ鮮人学生ヲ同地ニ招致シ第三期ヨリ毎期鮮人学生五名乃至二十数名を入学セシメ」（慶尚北道警察部『高等警察要史』復刻版、水野論文より）

1927年までに黄埔軍官学校のある広州にやってきた朝鮮人は800名以上に達したと言われている。黄埔軍官学校本校を卒業した朝鮮人は次の表のとおりである。金元鳳は9人目の崔林である。



中庭です



もうひとつの中庭



多くの観覧者来られています

表II 黃埔軍校朝鮮人卒業者

姓 名	號	年齢	籍 賀	通 訊 始	本 名
〔第三期歩兵科〕					
車 延 信	志一	23	朝鮮	廣東大学李見軒（航空）	金志一？
李 勝	情波	21	韓國威龍 北道	吉林汪清縣百草溝南埠地	
張 勝 省	聖哲	25	韓國	廣東大学李見軒（航空）	
劉 嶽 仙	治波	23	朝鮮韓城	黑龍江鶴崗市里	
〔第四期歩科〕					
姜 単 繩	杏海	25	韓國	北京西安門内茅屋胡同七號	
柳 道 鄭	春海	21	韓國	北京西安門内茅屋胡同七號過 渡社交	
朴 孝 三	海雲	21	韓國	咸鏡南道咸興郡咸興面中南里 九十號	
朴 建 雄		20	韓國	奉天興京縣旺達門	
崔 林		26	韓國	慶尚南道密陽邑城内	金元鳳
楊 健		24	韓國	慶尚南道密陽邑密陽面内一村	善人壽？
田 義 昌		20	韓國北平	北京東城北新橋梯子胡同十六 號	
李 恒 敏		23	韓國	奉天柳河三源浦 廉明學校	
崔 暉	武山	22	韓國	江蘇泰興縣西市508號影宅軒	崔重煥
李 集 中	松寧	27	韓國全羅 北道全州 郡	上海法界望志路北永吉里222 號	李仁洪
王 子 良	丹坡	26	韓國	慶南山滿郡行城面城内堂	
尹 衣 道		21	韓國京城	上海法界望志路南永吉路二十 八號交	
崔 淑 萍		20	韓國京城	吉林省哈爾濱道外南六道街路 西八號	
金 雅	石鶴	26	朝鮮	廣東大學姜世宇軒交	全容宰
李 錄 元		24	韓國	上海古北路吉祥里	
盧 一 龍		21	韓國未詳	平安道定州郡内韓仁病院	盧乙龍？
李 實 地	義木	24	韓國開城	廣東大學文科樹蔭軒	
〔第四期砲科〕					
吳 世 振	桂虎	24	韓國	奉天興京縣旺達門	
〔第四期工科〕					
金 浩 熟		23	朝鮮	韓城校園斜五道地軒交	
〔第四期政治科〕					
白 紅		23	韓國	南京管家橋太平巷二號率利號 交	
房 世 芳	全森	26	韓城平場	廣東廣州國立廣東大學校	
林 益 济		25	韓國	廣州大沙頭航空學校劉振仙軒	
文 善 在		24	韓國	黑龍江通河縣松江醫院	
盧 建		20	朝鮮	平安道定州郡内韓仁病院	盧英熙
〔第五期歩科〕					
申 岳	顯樹	30	韓國	京畿道楊平郡江下面全壽里	
安 錦 才	志成	20	朝鮮	北京宣外大教場六條一號趙士 隆軒	
張 興	強道	18	韓國	吉林省延吉縣龍井村八一或西 會軒	
金 浩 元		20	韓國	奉天省通化縣開山二道溝大泉 縣東泰路交	
張 興	黑石	33	韓國	朝鮮安城府三丁目	伍基誠

備考 (1)『中央陸軍軍官学校第五期同学錄』民国16年。より作成

(2)「本名」は水野による

水野正村軍官学校記録 53P

広州には他には朝鮮人が集まっていたが、日本官憲資料に以下の記録もある。

「本年（1927年）五月ニ於ケル各学校又ハ兵營ニ在ル鮮人学生ハ

一、黄埔軍官学校	一四名
一、黄埔教導団	五六名
一、沙河兵營	一五名
一、魚珠学生軍（魚珠砲台守備）	三六名
一、深圳要塞	五一名
一、広州東山陸軍病院	二〇名

一、中山大学
合計二百二十九名ヲ算スルに至レリ」（『朝鮮の治安状況
昭和二年版』、水野論文より）

国民党が支配地域を拡げていくに従い、黄埔軍官学校は分校を設置したが、そこにも朝鮮人は入校した。分校は、1925年に潮州（広東州）、26年に南寧（広西省）、27年に長沙（湖南省）、および武漢（湖北省）に設置された。特に武漢分校には多くの朝鮮人が入校した。武漢分校は、1926年後半の北伐の進展によって、長江（揚子江）地域まで支配下に収めた国民党が、国民革命軍強化のために本校と同じ規模で設立したもので、黄埔軍官学校分校としては最大であった。しかも、蒋介石ら国民党右派と対立していた左派は、中国共産党と協力して武漢国民政府を樹立したため、武漢分校も国民党左派と共産党の合作によって運営されることになった。

1926年11月、武漢分校設立のための委員会が成立したが、主席は国民党左派の鄭演達、委員には周恩来、郭沫若ら共産党员もいた。1927年2月に開校された武漢分校には、主に長江流域から学生が募集されたが、台湾、朝鮮、琉球、ベトナムの学生も秘かに募集されたという。以下のような記述もある。

「武漢中央軍事政治学校の朝鮮族は、元来その大部分が北伐軍第四軍に編入された青年士兵たちであり、そのほかに、一九二七年四月蒋介石が叛變するや、広州黄埔軍官学校で学んでいた第五期生たちと、武漢、上海、南京、長沙などいくつかの学校で学んでいた知識青年たち、延辯龍井の大成中学校と東興中学を中退して閑内にやってきていた朝鮮族知識青年たちだった。その数は当時二〇〇人近くになった」（『朝鮮族一〇〇年史話』第二輯、水野論文より）

黄埔軍官学校の教官を務めた朝鮮人もいた。次の表はその一覧である。

63 黃埔軍官学校と朝鮮の民族解放運動

表三 黃埔軍校朝鮮人教官

職別	姓名	号	年齢	籍貫	永久通訊地	本名
〔第五期教官〕						
中校教官 主任教官	楊 廉	志遠	27	吉林		金勲 (楊林)
少校隊附 区隊長	蔡元凱 崔秋海		28 27	韓國 韓國	中央軍事政治學校 上海法界白來尼海東公司	
区隊長	李逸泰		24	韓國平北		
区隊長	安應相	茂林	26	韓國平安	黑龍江通河縣松江醫院 交西北河	
〔教授部〕						
俄文教官	吳聲輸		27	韓國	〔出身〕 俄京東方大學	吳成峯
〔訓練部〕						
技術主任 教官中校	楊 富	志遠	26	吉林	雲南講武學校	金勲 (楊林)
技術助教 中尉	吳 明	白峯	24	韓國	雲南講武學校	

備考 表三と同じ 小字は西洋軍官学校 63P.

ここで俄文（ロシア語）教官と記されている吳聲輸は吳成峯のこと、義烈團に関わり1922年3月上海で田中義一暗殺を謀って逮捕されたが、脱獄し、モスクワの東方労働者共産大学（クートヴェ）でロシア語を学び、1926年に広州に移って黄埔軍官学校のロシア語教官となったのである。武漢分校にも複数の朝鮮人教官がいたようである。

黄埔軍官学校は、その後国民党の首都となった南京に移り、国民革命軍軍事学校、中央陸軍軍官学校などと改称されて、現在の台湾まで引き継がれる。

水野論文は、「黄埔軍官学校は、そこに多くの朝鮮人が関わったというだけではなく、朝鮮民族解放運動にあっても、また朝鮮人と中国人の共同闘争にあっても、重要な歴史的役割を果たしたものとして記憶されるべきである」と結ばれている。

今回の南京・広州訪問によって初めて黄埔軍官学校跡を訪問でき、現地で学べたことは大きな収穫であった。南京に移った軍官学校は南京のどこにあつたのだろうかなどと想像を膨らませる。

南京・広州フィールドワークの報告書は10月中に発行予定だ。必要な方は連絡ください。来年は20回目の訪中となります。南京のあとどこを訪ねようかなどと思いを巡らしている今日この頃です。



広州は孫文の生地です



孫文記念館、本館です



子どものころの孫文です。もちろん右です。